

風土的景観への居住者の認識に関する比較地域研究

-徳島県大里地区と奈良県学園前地区を事例に-

片岡 由香・三宅 正弘

学生員 徳島大学大学院先端技術科学教育部知的力学システム工学専攻 (〒770-8506 徳島県徳島市南常三島町 2-1)

E-mail: yukata-tokushima@hotmail.co.jp

正会員 工博 武庫川女子大学生活環境学部生活環境学科 兼 生活美学研究所 (〒663-8558 兵庫県西宮市池開町 6-46)

E-mail:miyakema@mukogawa-u.ac.jp

風土的景観は、その地域の風土が反映されて地域性が形成された景観であると考えられるが、実際にその地域の人々が必ずしも自分達の地域の風土を理解し、風土的景観を認識しているわけではないと思われる。

本研究では、2つの居住地を対象に風土的景観の実態と、それについての地域住民の認識について明らかにする。また、異なった環境の居住地を比較研究することにより、それぞれの居住者の意識の違いについて考察する。また昭和に開発されてきた郊外住宅地における地域性をもつ風土的景観の重要性を見出したい。

そして、そうした風土的景観が昭和の住宅地のアイデンティティにつながっていくのか否かを考えていきたい。

キーワード：風土的景観、生垣、石垣、居住者の認識

1. はじめに

地域の風土的景観は、景観によってはその地域の人々に認識されている場合もあれば、そうでないこともある。認識されている地域では、風土的景観を保全する取り組みがされており、認識されていない地域では景観の変化が著しくなっている傾向にあるのではないだろうか。

本論での風土的景観とは、一般的に風土と呼ばれるその地域の歴史や気候・文化、地域の産物や技術、人々の暮らし等の特徴が反映されて地域性が形成された景観であると定義する。

最近のまちづくりでは、こうした風土というものをあまり考えることなく、街並みがつくられている。そのため、地域の個性や独特の風景が次第に失われていく。特に、近年開発されてきたニュータウン等は、地域の歴史や文化の形成が目指されるが、それに加えその土地・地域の風土を感じられる要素がなければ、その地域に存在する住宅地であるという独自性や個性が現れず、今後ニュータウンのアイデンティティにも関係してくるであろう。

また、既存の歴史的な街並みや、住宅地の景観に地域性のあるものが構成されていたとしても、そこに住んでいる居住者がその存在を認識していなかったり、その景観を今後、維持・保存していこうと考えていないと風土的景観としての価値は生まれない。

このように本研究では、居住地において地域性を出したり、それを維持していくためにはどうしていけばいいのかを風土的景観に関する居住者の認識の違いを視点として考察することを目的とする。

事例としては、現在も歴史的な面影の残る徳島県大里地区と、関西地方の郊外住宅地と位置づけられ、近代以降に開発された生駒山麓斜面住宅地である奈良県学園前地区の2つの風土的景観が形成されていると考えられる地域を対象にする。また、本研究では学園前地区の風土的景観として‘生駒石の石積み’、大里地区の風土的景観として‘タケの生垣’を挙げることで、風土的景観の実態を調査するとともに、地域の人々がどのように風土的景観を認識しているのか明らかにしたい。

2. 戦後郊外住宅地と江戸期武家屋敷

(1)調査対象地

本研究では、異なったタイプの2つの居住地を調査対象としており、それぞれの対象地について以下の通り示す。

a)戦後郊外住宅地学園前地区

本研究で称している“学園前地区”については、奈良県奈良市の近鉄学園前駅北側に位置し、近辺でも代表的な『百楽園住宅地』と『学園緑ヶ丘住宅地』のことを示すことにする。

『百楽園住宅地』は、昭和34年より学園前北側道路沿いの土地約8万坪が開発された住宅地であり、『学園緑ヶ丘住宅地』は昭和40年代に百楽園住宅地の北側に約5万坪の土地が開発されたものである。戦後昭和25年頃より学園前駅を中心に宅地造成されたことを発端に、次々とブロック単位で大規模な宅地造成が行われ、駅の南北に住宅地が広がっている。また、この地域は大阪方面への通勤・通学者が多い郊外住宅地となっている。

そして学園前地区は、地場石材である‘生駒石’を用いた擁壁をもつ独立住宅の宅地が多く見られ、街路景観を構成している。

こうした特徴を踏まえ、本研究の趣旨から適していると判断し調査対象地として選定した。

b)江戸期武家屋敷大里地区

徳島県海部郡海陽町に位置する大里地区は、江戸時代前期に海部城の城代であった益田豊後氏が越権行為を起こしたことや、隣国である土佐藩に対する防備の必要からもここに海軍守備隊をおく必要が認められた。また、この大里地区は高知県との県境に位置しているため、国境守備の目的で“御鉄砲”と呼ばれる鉄砲の射撃を主力とする軍人も定住していた。このような大体同程度の下級武士が百戸以上この大里を中心として住居を構えていたことは、徳島県下には類例のない特種社会をつくっていたとされている。²⁾

上記に示す通り、大里地区はこうした守備隊が定住するようになる頃に、隣国に対する防備のために住宅地が迷路の役割を果たすように計画された。この迷路は現在も大里に残っており、住宅地となっている。また、御鉄砲や武士が定住していたということから、タケの生垣が約四百年経った現在でも残っており、住宅地の街路景観を構成している。

この大里地区の生垣は、自然環境を生かした歴史的な産物であり、この地域のもつ独特の風土的景観を構成していると考えたため、本研究の調査対象地として選定した。また、本研究では、大里地区の中でも比較的広い範囲で生垣が残っている浜崎地区と小路地区を対象に調査を行った。

(2)調査方法

上記で記した『学園前地区』と『大里地区』に関して現在どの程度、石垣と生垣が残っているのか実態調査を行った。

3. 風土的景観の実態

(1) 戦後郊外住宅地における生駒石の石積みの実態

図1に示すように、学園前地区では全体的に地場石材である生駒石の石積みが多く現在も残っていることが確認できる。しかし、建て直しをする際や新たにこの地域に土地を購入する際等に、元々あった石積みの擁壁を取り壊すケースも見受けられた。また、新たに宅地造成される際に生駒石が石垣や擁壁に用いられていることもない。



図1 学園前地区における生駒石の石積みの実態 1/5000

これは、開発者や現在この地域に住む住民やこれから新たに住宅の購入を希望する者等が生駒石の景観をそれほど認識していないためと考えられる。

(2)江戸期武家屋敷地区におけるタケの生垣の実態

次いで大里地区では現在でも道路を拡幅していない町道が多く残っていると同時に、タケの生垣とマキの生垣が図2に示す通り残っていることが確認できた。



図-2 大里地区における生垣の実態 1/5000

現在残っている生垣は、タケの生垣よりもマキの生垣の方が主要となってきたことがこの図よりわかる。

また、これらの生垣は、時代とともにブロック塀に変わってきている箇所も見受けられた。

このように大里地区では、長期的に手入れの必要な生垣が数多く現存しており、この地区の街路景観として大きな要素となる生垣に関して地域住民が認識しているように推測される。

4. 風土的景観に対する居住者の認識について

学園前地区と大里地区において、風土的景観に対する認識について居住者に同様のアンケート調査を行った。

アンケート調査では、風土的景観を構成していると考えられる生駒石の石積みやタケの生垣についての認識、景観全体としてはどう思っているのか、今後現在の景観を維持したいと考えているのかを調査した。

5. おわりに

学園前地区では全体的に地場石材である生駒石の石積みが多く現在も残っていることが確認できたが、新たに宅地造成される際に生駒石の石垣や擁壁がつけられてい

ない等、今後も長期的にこの状態が維持されていくのか否か危ぶまれる状況である。

また、大里地区ではタケの生垣とマキの生垣が現在も広い範囲で残っていることが確認できたが、この地区の街路景観として大きな要素となる生垣に関して地域住民が認識しているように推測される。

これに関する居住者の認識については、後に考察する。

参考文献

- 1) 三宅正弘: 「山麓斜面地住宅地における風土的景観の特質とその保全に関する環境計画的な研究」, 1998年
- 2) 徳島県海部郡海南町教育委員会: 海南町史, 1966年

謝辞: この研究にご協力を頂いたすべての方に深く感謝の意を表します。